

「褐色の司祭」から見たナチス期のカトリック教会

島田 勇 人

【要約】 ナチス期のカトリック教会に関しては、従来、強固なヒエラルヒーや世界観によってナチスと対立関係にあったことが強調されてきた。しかし一方で様々なレヴェルでのナチスへの接近者が存在したことも事実であり、本稿で扱う「褐色の司祭」たちもこれに属するものである。多くの同僚が迫害を受ける中で、そして、カトリック・ミリュエーの「核」を担っていたとされる「司祭」という存在であるにもかかわらず、彼らはなぜナチスへ接近し、どのような運命を辿ったのか。本稿ではまずヴァイマル期における彼らの動向を追い、そこからナチスへと接近していった道筋を辿る。次に、他の接近者たちの動向に注目しながら当時のカトリシズム内での位置付けを探り、最後にナチス体制下における彼らの具体的な活動の展開を明らかにする。これらの考察を通して「褐色の司祭」という存在を問い直し、ナチス期のみならず、近代におけるカトリック教会の歴史的展開を探る上での一助としたい。

史林 九〇巻二号 二〇〇七年三月

はじめに

反人道的性格を露にした「褐色」の嵐が吹き荒れていたナチス期、ドイツのカトリック教会はその嵐に対しどのような態度を示していたのか。この問いは、単にナチス体制下での教会の行動を称揚、或いは批判するためだけではなく、一八七一年以来少数派であったとはいえ常に政治・社会領域において大きな影響力を保持し続けていたカトリシズムの歴史

的展開を明らかにする上でも重要な意味を持つている。本稿もまた、ナチス体制崩壊後六〇年を経た現在でも繰り返されているこの問いに対し、一つの返答を模索するものである。

この領域における従来の研究史では、カトリック教会とナチスの対立的な側面が主に強調されてきた。一九三七年の皇国勅やナチス期を通じて再三行われた司教団教書による抗議活動、多数の下級聖職者や信徒組織の抵抗と迫害については数多くの研究成果がある。^①また教会史の隣接領域においても、教会を中心としたカトリシズムがナチ党の台頭やナチス体制の全体的要求に対する抵抗勢力となっていたことを示す研究には事欠かない。^②たしかに、これらの研究が描き出してきたナチス期のカトリック教会の動向は、自陣から「ドイツ・キリスト者 Deutsche Christen」という親ナチ組織を輩出する中で分裂状態に陥っていたプロテスタント勢力と比較するならば、鮮やかな対照を成していると言えよう。^③しかしこれらは歴史の一面である。というのも一方では一九六〇年代から既に、教皇や司教団といった高位聖職者の反共産主義やナシヨナリズムにおける熱狂^④、カトリック思想家の「ライヒ」思想での共鳴^⑤などが指摘されているのである。また近年では、カトリシズム全体を貫いていた反ユダヤ主義や「ヒトラー神話」^⑥、さらには司教とともに教会の神学・教育的支柱を形成していた著名な神学者たちのナチスへの傾倒^⑦も明らかにされつつある。こうした謂わば「負」の側面にも眼を向けて初めて、カトリック教会とナチスとの関係についての全体的な把握が可能となろう。またこのような観点からは、「カトリック・ミリュウ」という理念型の下に反近代・反世俗的国家・反プロテスタントという性格によって一般化される傾向にある、近代ドイツのカトリシズムが内包していた多様性を掬い取ることもできよう。^⑧以上のことから本稿では、積極的な親ナチ活動を展開して「褐色の司祭 Braune Priester」と呼ばれていたカトリック聖職者たちの存在に注目する。なお「褐色の司祭」という語は、ナチス側では協力者への賛辞や歓迎、逆に教会側では裏切り者への侮蔑の意が込められた當時からの呼称であるが、現在一般には「ナチ党へ入党していた司祭」並びに「ナチ党やヒトラーへの明らかな傾倒が見られる司祭」を指すものとして使用されている。

戦後に非ナチ化政策を行った占領軍の報告書によればナチ党へ入党していたカトリック聖職者はおよそ一五〇人程度であり、その数はナチス期に在職であった聖職者の総数の一パーセントにも満たない。また、多くの聖職者がナチスのテロの被害者であったというデータから「大多数の下級聖職者がナチスと対立していた」というテーゼが支持されてきたこともあり、従来「褐色の司祭」への関心はほとんど払われてこなかった。彼らはいくつかの概説書において僅かに触れられる程度の存在に過ぎなかったのである。またこのことには、一九九〇年代以降増加しているミリュウ研究が、各地域においてカトリック・ミリュウの「核」としてプロテスタント的・世俗的国家への「抵抗」を率いる司祭像をさかんに描き出してきたことも影響していると思われる。しかし一九九〇年代には一方で、親ナチ司祭として当時から著名であった者に關する伝記的研究が相次いで発表され、また東ドイツ側に残されていた史料を利用した研究によっても「褐色の司祭」の重要性が認識されるようになる。それらの中には自らの信念の下にナチス体制の中核で教会政策を担当する者すら存在したのである。謂わば「褐色の司祭」たちのイデオログ的存在であった彼らは、「裏切り者」という罵倒に對し自らを「教会と国家の架け橋」であるとしてさかんに応戦し、また、親ナチ態度を取っていた聖職者を部下やスパイとして自陣に雇い入れてもいた。⑭ いずれにせよこれらの諸研究によれば、彼らのナチスへの接近動機は「日和見主義」や「出世主義」といった個人的傾向、そして特に頻繁に、強烈な「愛国主義」や「反ユダヤ主義」といったイデオロギーでの共鳴にあった。そこから「褐色の司祭」は当時の下級聖職者の中では「例外的アウトサイダー」「少数の裏切り者」であったと位置付けられている。

しかし以上の先行研究が「褐色の司祭」へ向けるまなざしは、以下の二つの問題点を孕んでいる。まず第一に、そこには始めから「ナチスへの傾倒者」という前提が組み込まれていることである。⑮ それ故、分析の対象時期はナチス期に集中し、また特に接近動機に關してはナチズムに特徴的なイデオロギーを指摘するだけで事足りりとされているのである。しかし、「褐色の司祭」たちの多くはナチ党が結成される以前から既に政治的活動を開始しており、ナチスとの協力関係は

ヴァイマル期を通じて果たされたものであったことはこれらの研究も指摘してきたことである。ナチスへの接近動機を正確に抽出するためには、まだ「褐色」ではなかった時期の彼らの声にいま少し耳を傾け、その活動動機を明らかにした上でナチスへの道筋を辿ることが望ましい方法であろう。

第二の問題点は、そのデータ上の少数性に起因していると思われる、「例外的な」裏切り者という暗黙の前提である。それ故「褐色の司祭」は、ナチス期における単なるエピソードとして個別の研究で取り上げられるのみで、それらの存在が一つの勢力として問題視されることはなかった。しかし本稿で示すように、彼らはその活動時期や動機、教会上層部との関係やナチス体制下で置かれた状況において多くの共通性を持つていた。また、ここからはカトリシズムとナチスの親和的側面を総体的に捉えようとする視座が欠けていることも指摘できよう。「褐色の司祭」の存在意義や位置付けを明らかにするためには、それぞれ別個に扱われてきた彼らの動向を一つの視野の中に収め、さらに、以前から指摘され続けてきたナチスへの他の接近者との関係について分析することが必要である。

これらの問題点を踏まえ本稿では、まず第一章で、のちに「褐色の司祭」と呼ばれることになる聖職者たちのヴァイマル期における動向や活動動機を明らかにし、そこからナチスへと接近していった道筋を辿る。第二、三章では、他の接近者たちの動向に注目しながらナチスが政権を掌握した一九三三年前後のカトリシズムの状況を、そしてナチス体制下における「褐色の司祭」たちの具体的な活動の展開を明らかにし、その位置付けを探る。なお、史料は主に彼らの手によるパンフレットや論文、著作の類を使用する。

① 代表的なもののとして Goto, K./ Rengen, K.(Hg.), *Die Katholiken und das Dritte Reich*, 3. Aufl., Mainz, 1990; 河島幸夫「ナチスの政権掌握とカトリック教会」『西南学院大学法学論集』三三―二・三三号、二〇〇〇年、一―四四頁(以下、「政権掌握」と略記)。同「回勅」『深き憂慮に満たされて』の背景と意義『西南学院大学法学論集』三四

―二・三三号、二〇〇二年、二五―六九頁。また、一九六二年にドイツ司教団の呼びかけによって設立された「現代史委員会 Kommission für Zeitgeschichte」によって、同じ視点から多数の史料集や研究書が刊行されている。

② 例えば、村瀬興雄『ナチス統治下の民衆生活』東京大学出版会、一

- 九八三年。野田宣雄「教養市民層からナチズムへ」名古屋大学出版会一九八八年。原田一美「ナチ独裁下の子供たち」講談社一九九九年。
- ③ ナチス期のプロチスタント勢力に関しては、河島幸夫「独裁国家と教会」今岡恒夫他著『教令』ミネルヴァ書房、二〇〇〇年、三九一―八四頁。
- ④ Bokenförde, E. W., Der deutsche Katholizismus im Jahr 1933, Hochland 53(1961), S. 215-239; Lewy, G., *The Catholic Church and Nazi Germany*, New York, 1964.
- ⑤ Breuning, K., *Die Vision des Reiches*, München, 1969.
- ⑥ Blaschke, O., Die "Reichspogromnacht" und die Haltung von katholischer Bevölkerung und Kirche, *Zeitschrift für Religions- und Geistesgeschichte* 52(2000), S. 47-74; Kertzer, D. I., *The Popes Against the Jews*, New York, 2001.
- ⑦ Kershaw, I., *The "Hitler Myth"*, Oxford, 1992 (柴田敏二訳『ムンヘー神話』刀水書房、一九九三年)。
- ⑧ 原稿「包摂的ナチズム」は、Denzler, G., *Widerstand ist nicht richtig* *Wort*, Zürich, 2003.
- ⑨ 近代化から疎外された人々に教会がマイテンティナイの拠り所を提供し、特にカトリック地域では一九一〇世紀半ばにかけて強固な政治・社会・宗派的一体性（＝ミルニエ Milieu）が築き上げられた。とするミルニエ研究では、ナチスとカトリシズムについては華や対立面が強調されている。たしかにミルニエという概念は、近代ヨーロッパ社会におけるキリスト教圏宗派にわたる比較研究を行う際、は有用であり、それ故特にドイツ語圏においては近年さかんに議論がなされ数多くの研究が発表されている。研究動向に因つては、Lönne, K. E., *Katholizismus-Forschung, Geschichte und Gesellschaft* 26(2000), S. 128-170. しかしその一方で、その枠には収まりきらない多様な歴史
- 具体的事象を捨象する危険性を孕んでいるものと筆者は考える。ミルニエ研究の理論的枠組みに因つて、Arbeitskreis für Kirchliche Zeitgeschichte Münster, *Katholiken zwischen Tradition und Moderne, Westfälische Forschungen* 43(1993), S. 588-654.
- ⑩ Spotts, F., *The Churches and Politics in Germany*, Middletown, 1973, S. 109.
- ⑪ Hehl, U. v./ Kösters, C.(Bearb.), *Priester unter Hitlers Terror*, 2Bde., 3. Aufl., Paderborn, 1996.
- ⑫ 原稿「ナチ」Lewy, aO.; Scholder, K., *Die Kirchen und das Dritte Reich*, Frankfurt/M., 1977.
- ⑬ 上級知識層とナチスに因る社会的不安のトキやを打ち出したクルールは、つづいた「ミルニエ」研究による歴史家をナチス期に因つては援用する歴史的な論議で、Hehl, aO., S. 107-113.
- ⑭ Tröster, W., "...die besondere Eigenart des Herrn Dr. Pieper!", in: Wegner, U.(Hg.), *Das Erzbistum Paderborn in der Zeit des Nationalsozialismus*, Paderborn, 1993, S. 45-91; Bleistein, R., Abt Alban Schachleier OSB, *Historisches Jahrbuch* 115(1995), S. 170-187 (Schachleier への寄稿)；ders., Überläufer im Sold der Kirchenfeinde, *Beiträge zur althessischen Kirchengeschichte* 42(1996), S. 71-109 (Schachleier への寄稿)；Baumgärtner, R., Vom Kaplan zum Ministerialrat, in: Stammes, T./ Oberreuter, H./ Miklat, P.(Hg.), *Politik-Bildung-Religion*, Paderborn, 1996, S. 221-234.
- ⑮ Brandl, L., Neue Quellen zum Reichskonkordat vom 20. Juli 1933, *Zeitschrift für Politik* 38(1991), S. 428-449; Krenner, H., *Das Reichskirchenministerium im Gefüge der nationalsozialistischen Herrschaft*, Düsseldorf, 2000; Beiser, G., *Die Kirchen und das Dritte Reich*, Berlin, 2001; Dienker, W., *Himmlers Glaubensstreiter*, Paderborn,

2002.

⑬ 地方レヴェルにおける「褐色の司祭」たちについても、近年、地方史研究によって教会内に残された個人史料の網羅的な分析が進められる中でその存在が「発見」され語られるようになってきている。例えば、Fandel, T., *Konfession und Nationalsozialismus 1930-1939*, Paderborn, 1997, S.466-505; Spicer, K.P., *Resisting the Third Reich*, DeKalb, S.139-159. しかし以下で述べるように本稿では「褐色の司祭」たちを一つの勢力として捉えることを主眼の一つとしているため、イデオログ的存在であった者たちに着目してその共通性を抽出するという方法を採用している。

第一章 ヴァイマル期における「褐色の司祭」

(一) 政治闘争団体の中の「褐色の司祭」

ヴァイマル共和国研究史においては、一九一九年から一九二三年までの不安定な政治状況をしばしば「危機の共和国」と呼ぶ^⑭。共和国の草創期にあたるこの時期には、左右両翼から反体制的蜂起が頻発し政府要人の暗殺が続く中、いくつもの内閣が矢継ぎ早に現われそれぞれ消えていった。また、ヴェルサイユ条約やルール地方の占領などをめぐる対外状況、国内外における諸々の分離運動の活発化によって、新国家の存続はまさに風前の灯であった。そうした中、のちに「褐色の司祭」と呼ばれることになるカトリック聖職者たちの多くは、当時隆盛を極めていた諸政治闘争団体においてその政治活動を始めていたのである。

政治闘争団体 *Politischer Kampfband* とは、「危機の共和国」において各地の元軍人を中心に、自警団・義勇軍的な要素を強く持った集団として多数結成されたもので、全体として一五〇万人にも及ぶ動員数があったとされている^⑮。やがて

⑭ これはおそらく「褐色の司祭」に関する先行研究の多くが、カトリック教会とナチスの対立的側面を明らかにすることに関心を持つ聖職者或いは教会関係者（註⑬で挙げた研究者は全てこれに該当する）によって担われてきたことと関係していると思われる。つまり彼らの「褐色の司祭」への注目は、「大多数の下級聖職者がナチスと対立していた」というテーゼを逆照射するためのものである。

⑮ この点に関して、ヴァイマル期への注意を喚起したクロイツァー（註⑬参照）の記述は例外的であると言えるが、しかしそれも以下に述べる第二の問題点を免れてはいない。

共和国が相対的安定期を迎える一九二四年以降は左右両翼における政治的な大衆闘争組織へとその質を変化させていき、議会制民主主義やヴェルサイユ体制の打倒を目標に、活発な議会外活動を行うようになる。そのような中で突撃隊という政治闘争団体を組織しながら成長していたのがナチ党であり、そしてまた、少なからぬ数のカトリック聖職者が所属していたのが、鉄兜団 *Stahlhelm* と青年ドイツ騎士団 *Jungdeutscher Orden* という極右勢力における二大組織である。これらとナチ党などの極右政党は連帯関係にあり、複数の組織に重複して籍を置く者も多かった。しかし少なくともヴァイマル末期までは、のちの「褐色の司祭」たちの活動の重心は前者に置かれており、当時の発言にはまだヒトラーやナチ党への言及はほとんど見当たらない。彼らは担当する教区での司牧活動と同時に、自身が所属する政治闘争団体の宣伝活動や集会での演説、ミサの執行、さらには盛んな執筆活動も行っていた。たしかにその中では素朴な愛国主義的、並びに反ユダヤ主義的言動が見られる。では、そもそも彼らはなぜこのような組織に参加したのだろうか。

パーデルボルン大司教区の司祭ロレンツ・ピーパーは、一九二二年にナチ党に入党し、のちに著名な「褐色の司祭」の一人として知られるようになる人物であるが、既に一九二〇年三月に結成された青年ドイツ騎士団の初期メンバーに名を連ねていた。彼は一九二二年六月に行われたその集会についての報告書の中に、「青年ドイツ騎士団とカトリック教徒」と題した短いものではあるが、自身の政治的心情を吐露した文章を載せている。その冒頭部で「カトリックとして、そして聖職者としての私かなぜ青年ドイツ騎士団を支持するのか？」と自問し、彼は以下のように答えている。

第一に青年ドイツ騎士団がキリスト教的な深い隣人愛を、最上級の原則・精神としてその内部に維持していること。第二にそれが数世紀以来ドイツの不幸であった宗派や政党間の対立に橋を架ける運動であること。第三にそのことによって復興のために必要な前提条件である、精神・民族・国民的統一戦線を作り上げること。第四にそれがドイツ民族の経済・政治・文化的復興の基礎として、道徳的再生を目標としていること、これらの理由によるのである。^④

また、一九三五年には帝国教会省 *Reichskirchenministerium* のカトリック部門長官となる代表的な「褐色の司祭」ヨ

ゼフ・ロートは、当時はまだミュンヘン・フライジング大司教区の助祭であった。彼は一九二四年の『神と祖国のために』という小冊子の中で、「国家の再建にはキリスト教を基盤とすることが必要である」が、現在教会によって公認されているカトリック系の諸連盟組織は「単に宗派利害を追うだけの中央党の道具」と化してしまっており、それは新たな「宗派対立」と「三〇年戦争」を繰り返すだけであると批判する。そこから彼は、「民族共同体」の統一のためには自身が所属する青年ドイツ騎士団や鉄兜団などの政治闘争団体が必要であると言っているのであるが、その理由の第一のものとして以下のことを述べている。

政党的なカトリシズムによって罵倒されている愛国的な組織が、その力と生命の源としているのは、キリスト教の隣人愛的思想である：「中略」：「その中で」ドイツのカトリックとプロテスタントは、全てのキリスト教宗派にとっていまだ唯一共通である主の祈りという基礎において信頼し合うことができ、またそうあらねばならない。それによってカトリックの独自性が消えることは決してない。むしろ逆にそれは深まり、明瞭になるであろう。^④

さらに、戦後すぐに政治活動を始めていたアウグスブルク司教区の司祭フィリップ・ホイザーもまた、一九二二年の小冊子『我々ドイツ・カトリックと現代の革命運動』の中で、政治闘争団体の存在を擁護している。彼によれば、第一次世界大戦時は階級や宗派を超えた国民的精神によって、カトリックに対するプロテスタント側からの古い偏見が消え去っていた「素晴らしく、偉大な時代」であったが、現在（ヴァイマル期）は、中央党などの「日和見主義者」のおかげでカトリック全体に対する疑念が再び生まれてしまっている。それ故失われた統一を取り戻すためには、宗派を超えた「国民的思考」に基づき、「武器を取ってその命を捧げる者たちの集団」である政治闘争団体の欠かせないものなのであった。^⑤

このように、ここで挙げた三者の政治活動はドイツ社会における「宗派対立の克服」という目標に端を発していたのである。彼らにとって鉄兜団や青年ドイツ騎士団といった政治闘争団体は、そのための道具であった。これまで指摘されてきた彼らの愛国主義的言動は、このような教会政治的な展望のもとに展開されていたことは見逃せないだろう。では、反

ユダヤ主義は彼らの活動にとってどのような意味を持っていたのか。

ロートは一九二三年の小冊子『カトリシズムとユダヤ人問題』で、「キリスト教の隣人愛とは、不道徳なものを妨げ、罪と罪への危険性を遠ざけて初めて真なるものとなる」のであるから、退廃したユダヤ人を排斥することはカトリックの教えに反することではなく、現在のユダヤ人による世界支配を覆すためにさらに強化するべきものであると述べている。またホイザーは一九二三年の論文「教会の立場から見たユダヤ人問題」で、シオニズムとフリーメイソンを駆使し革命を引き起こして世界の財界を牛耳るユダヤ人、という紋切り型のユダヤ人批判を展開している^⑩。これらを一瞥しただけでも、この司祭たちの反ユダヤ主義が所謂ナチス・イデオロギーの中の反ユダヤ主義とは由来を異にするものであることが明らかである。なぜなら前者は、「ピラトウスの故に呪われたユダヤ人」や「キリスト者の敵としてのユダヤ人」というカトリシズムに伝統的なものであり、優生学を基盤とした人種論的言説はたとえ使用されていたとしても論理的にほとんど意味を持っていないのである。また既に見たように、そもそも彼らが「国民的思考」や「民族共同体」というレトリックを使用する場合、それは「非アーリア人に対するアーリア人種の団結」や「指導者崇拜の貫徹」という含意はなく、むしろ「キリスト教精神において統一されたドイツ人」のことを指している。さらに、彼らの反ユダヤ主義的言動の中には自身の具体的な政治活動と結びつける論理が見当らないことを考え合わせれば、彼らにおいて反ユダヤ主義は、「宗派対立の克服」というその政治的最終目標を補完する役割を果たすものに過ぎなかったと言える。

（二） 宗教問題へのナチ党の態度

では、このような動機に端を発した活動の中で、彼らがナチ党との接触を深めていったこと的背景には何があったのだろうか。この問いに対し、一九二〇年代後半における政治闘争団体の衰退とその一方でのナチ党の急激な台頭、という説明のみでは不十分であろう。彼ら自身の声を聞く前に、まずは宗教問題に対するナチ党の態度から見てみたい。

ヴァイマル共和国憲法はその第一三七条において「国教会は存在しない」と規定している。これはヴィルヘルム帝国が明瞭にプロテスタント帝国の様相を呈していたことに對し、新国家は政教分離路線を前面に打ち出したことを物語っている。しかし文面上はどうであれ、実際の政治情勢は宗教政策をめぐって大きく左右され続けていたと言つてよい。憲法草案時から問題となつてきた宗派別学校に関する問題や一九二五年の大統領選挙などに見られるように、キリスト教勢力と社会主義勢力の対立、そして何よりカトリックとプロテスタントの宗派対立はヴァイマル期の政治文化に色濃く影響を及ぼしていたのである。^⑮

しかし各政党がそれぞれの支持基盤層が望む宗教政策を打ち出す中、それに対しナチ党は決定的な態度を取ることはしなかつた。^⑯それはナチ党やヒトラーにとつて、彼らが目指すべき「民族共同体」が宗派や階層の垣根を越えたものであることは自明であつたことに加え、何より、宗教政策に何らかの立場を取ることで特定の勢力と結びつき、或いは排除してしまふことを回避しようとしたからである。とは言え、反マルクス主義を旗印としていたナチ党が、キリスト教勢力との連帯を見せつけようとしたことは当然であつた。このことは一九二二年に採択されたナチ党綱領第二四条に明確に表れている。

我々は、それが国家の存続を脅かさず、或いは、ゲルマン人種の道徳感情に反しないならば、国内における全ての宗教的信仰の自由を要求する。そのようなものとして我が党はある一定の宗派と結び付くことなく、積極的キリスト教 *Positives Christentum* の立場を代表するものである。^⑰

ここに見られる「積極的キリスト教」という語を顧慮して初めて、のちの「褐色の司祭」たちが既にヴァイマル初期においてナチ党とも接触を持ち、連帯することが可能であつたことが理解できよう。このレトリックはナチズムの擬似宗教性、或いは本質的な反キリスト教性を覆い隠すとともに、宗派対立の泥沼に入り込んだ様相を呈していたヴァイマル期の諸政党を一まとめに切り捨て論理を持つものであつた。彼らがこれを好意的に受け取つていたのであろうことは想像

に難くない。また、ヨゼフ・ゲッペルスやディートリヒ・エックルトなどナチ党内での指導的な地位にある者に加え、愛国心に満ちた勇敢でエネルギッシュな党首アドルフ・ヒトラーもまたカトリック教徒であったことは、彼らにある種の親近感を覚えさせた筈である。そして、前述のように一九二〇年代後半以降に政治闘争団体がその勢力を衰退させていく中、次なるパトロンを模索していた司祭たちの目の前で、この「積極的キリスト教」を掲げたナチ党が急激に勢力を拡大させていたのであった。

（三） ナチ党の台頭と「褐色の司祭」

一九三〇年九月に行われた帝国議会選挙によってナチ党は第二党へと大躍進を遂げる。この選挙でカトリック教会の利益政党であった中央党・バイエルン人民党が大幅にその議席を減らすことはなかったものの、ナチ党の急激な成長はカトリック教会上層部に強い懸念を抱かせた。そのため各地の司教たちは相次いで声明を発表し、聖職者や信徒のナチ党への入党禁止、そして時にはナチ党員への秘蹟の拒否さえも決定している^⑧。国内のカトリック・ヒエラルヒーの頂点である司教団によって下されたこの診断は司祭たちにとって絶対的なものであり、また実際に司教たちはこれ以降ナチスへの接近者に対して容赦ない警告でヒエラルヒーへの服従を要請した。既に政治闘争団体からナチ党へとその活動の場をシフトさせつつあった司祭たちは司教たちのこの拒否姿勢によって、カトリック司祭としての職業倫理と自らの政治的情熱との間の葛藤に心を悩ませたであろう。しかし彼らの多くは司教による服従の要請を苦慮しつつも受け流し、自らの信念を貫く道を選んでいく。例えば先に見たピーパーは司教の威嚇によって教会からの疎外を恐れた結果一九三三年に脱党を決意するに到っているが、これはあくまで表面的な偽装に過ぎずそれ以降も地域のナチ党勢力の実質的なリーダーとして活動し続けている。また以下に見る二人の司祭たちは、自らの政治的信念の正当性の主張と司教団の態度決定への批判を公にして停職処分に処されているが、彼らの言葉からはナチ党やヒトラーに接近した司祭たちの意図を明確に読み取ることがで

きる。

フライブルク大司教区の司祭ヴィルヘルム・ゼンは既に以前からナチスと親しい関係にあったが、一九三〇年秋以降の司教団による一連の声明発表後さかんな講演活動を行い、その内容を一九三一年に小冊子『カトリシズムとナチス』として出版している。彼のそもそもの政治的目標は冒頭部の以下の記述に明確に表れている。

ドイツの紳士・淑女諸君！我々は現在キリスト教の中で生きている。我々はこの瞬間、ドイツが残念ながらこの四〇〇年来分裂してきたことを一度忘れようではないか。むしろ今考えるべきなのは、およそ一五〇〇年もの間、我々ドイツ人はただ、一つの教会の息子であったということである。^④

宗教改革以前の二五〇〇年をドイツ人はキリスト教の下に生きてきたというその歴史観の不正確性はともかく、その直後の箇所で「ドイツ人皇帝が世界の支配者であった中世」を称揚していることから、彼が宗派分裂以前への回帰をその政治的理念の中心に据えていたことは間違いない。しかしこのことを妨げているのは彼によれば、その宗派的利害関心からマルクス主義勢力（ここでは社会民主党を指す）と偽りの同盟を結んでいる中央党の存在である。それ故パンフレットを通じて激しい中央党批判が展開されるが、この状況を打開するために必要とみなされているのが、カトリック地域であるバイエルンに生まれた「ドイツ民族の子供」であり、その党綱領の中で「積極的キリスト教」の立場を明確に謳っているナチ党なのであった。^⑤

ミュンヘンに滞在していたアルバン・シャハライターも司教たちの決定に対し異議を唱えた一人であった。プラハの大修道院長として第一次世界大戦期を過ごした彼は、戦後すぐにドイツ本国に戻り、やはり青年ドイツ騎士団や鉄兜団の活動の中でヒトラーとの接触を深めている。その過激な政治的発言の故にミュンヘン・フライジング大司教ファウルハーバーから度々警告を受けてはいたが、しかし彼もまた一九三〇年以降もナチ党との接触を断念することはなく、ナチス側からも厚い信頼を得ている。そしてヒトラーが首相の座に就いた二日後の一九三三年二月一日、彼はナチ党機関紙に「敬

虔なカトリック教徒への慰安の言葉」と題した記事を寄せ、カトリックの間に広まっていたナチスへの猜疑心を取り払い、新しい首相への賛同の声を喚起しようとした。そこで彼は、ナチ党にはドイツ社会と同じ比率で宗派が混在しており、「ナチ党は決して特定の宗派政党ではなく、ドイツにおいて従来全く考えられなかったほど平等にプロテスタントとカトリックを扱うだろう」こと、そして「積極的キリスト教」を謳う党綱領第二四条とヒトラー自身の発言がそのことを保証している、ということ強く訴えている。それ故、ナチスとカトリックは一致できないという司教団の診断は誤りであり、むしろナチ党にカトリックが参加しないことによつて「ナチスという自由な運動がプロテスタントのものになつてしまつたならば」、「再び三〇年戦争の恐怖を思わせる時代がやってくるだろう」と言うのであつた^②。

以上本章で見えてきたように、のちに「褐色の司祭」と呼ばれることになる者たちの初発の政治的動機は、宗教改革以来のドイツ社会における「宗派對立の克服」であつた。ナチスへの接近は彼らにとつてその目標を実現するための手段であり、その際「積極的キリスト教」というレトリックで示されたナチスの宗教問題への態度が、彼らの期待の中心を成していたのである。次章以降では、こうした動機を持つた彼らを当時のカトリシズムの中でどのように位置付けることができるのかについて考察する。

- ① Kolb, E., *Die Weimarer Republik*, München, 1986 (柴田敏二訳「プロイマル共和国史」刀水書房、一九八七年)。
 ② 政治闘争団体の詳細に関しては、岩崎好成「ワイマル期民間国防団体の政治化」『史学研究(広島大学)』一六〇、一九八三年、五一—七二頁。
 ③ 本稿で扱う「褐色の司祭」に関する記述は、特に記さない限りそれぞれ以下を参照：ロレンツ＝ビーバー(一八七五—一九五二)は、*Tröster*, aao. ヨゼフ＝ルート(一八九七—一九四二)は、*Baumgärtner*, aao. アルバン＝シヤハラライター(一八六一—一九三七)は、*Bleistein, Schleiher*. アルベルト＝ハートル(一九〇四—一九八二)は、*Bleistein, Überläufer* ; *Dieter*, aao, S. 96-118. # た、フィリップ＝ホイザー(一八七六—一九六〇)とヴィルヘルム＝ゼン(生没年不詳)に關しての伝記的研究は管見の限り見当たらないが、以下の概説書に若干の記述が見られる。Lewy, aao.; Scholder, aao.
 ④ Pieper, L., *Jungdeutscher Orden und Katholiken*, in: *Denkschrift zur Westdeutschen Kundgebung des Jungdeutschen Ordens am 17. und 18. Juni 1922 in Barmen-Elberfeld* o. O., 1922, S. 19.

- ⑤ Roth, J., *Für Gott und Vaterland*, Kassel, 1925, S. 4-12.
- ⑥ *Ebenda*, S. 14. なお、本稿の引用部の括弧内〔 〕は筆者による補記による。
- ⑦ Häuser, P., *Wir deutschen Katholiken und die moderne revolutionäre Bewegung*, Regensburg, 1922, S. 7ff.
- ⑧ *Ebenda*, S. 41f.
- ⑨ *Ebenda*, S. 32ff.
- ⑩ Roth, J., *Katholizismus und Judenfrage*, München, 1923 (以下、*Judenfrage*と略記), S. 5.
- ⑪ Häuser, P., Die Judenfrage vom kirchlichen Standpunkt, *Das Neue Reich* 5(1923/24), S. 442-446.
- ⑫ *Ebenda*, S. 445.
- ⑬ Roth, *Judenfrage*, S. 10ff.
- ⑭ 清水望『國家と宗教』早稲田大学出版部、一九九一年、七六頁。
- ⑮ 室懸『宗教政党と政治改革』早稲田大学出版部、一九七七年。Kittel, M., Konfessioneller Konflikt und politische Kultur in der Weimerer Republik, in: Blaschke, O (Hg.), *Konfessionen im Konflikt*, Göttingen, 2002, S. 243-297.
- ⑯ Lewy, aaO, S. 7.
- ⑰ Denzler, G./ Fabricius, V. (Hg.), *Christen und Nationalsozialismus*, Frankfurt/M., 1993, S. 249.
- ⑱ ナチ党の台頭とカトリック教会の一般的な関係については、河島『政権掌握』。
- ⑲ Senn, W. M., *Katholizismus und Nationalsozialismus*, Münster, 1931, S. 6. なお、傍点部は原文による強調箇所による。
- ⑳ *Ebenda*, S. 6f.
- ㉑ Schachleiter, A., Ein Wort zur Berruhigung für strenggläubig Katholiken, *Völkischer Beobachter*, vom 1. Februar 1933.

第二章 「褐色の司祭」と他の接近者たち

(一) ナチスの政権掌握と教会上層部

はじめに述べたように、カトリシズム内でのナチスへの妥協的態度や同調者の存在が様々な領域で見られたことは既に一九六〇年代から指摘されてきた。そうした動きの多くはナチス体制が成立した一九三三年三月以降に活発化しているが、まずはそうした状況を可能にした教会上層部の対応から見ていきたい。

ヴァイマル末期に著しい台頭を果たしたナチ党に対し、ドイツ司教団が否定的な診断を下したことは既に述べた。しかしその抗議姿勢は徹底したのではなく、教会上層部内でもナチ党への態度には温度差があった^①。そして一九三二年七

月の総選挙によってナチ党が第一党に、一九三三年一月にはヒトラーが首相の座を獲得すると、もはや彼らの存在を拒否し続けることは現実的な方策ではないとする見方が強まっていく。そのような政治展開の中で司教団の態度に決定的な影響を与えたとされているのが、一九三三年三月二三日のヒトラーの議会演説である。全権委任法をめぐる採決の数時間前に行われたこの演説でヒトラーは、ナチ党への権力移譲に戸惑いを見せる中央党とその背後にいる司教団から賛同を得るため、諸宗派の平等の尊重と教育領域における教会の影響力容認という宗教政策上の方針を明確に宣言したのだった^②。この演説をきっかけに中央党は全権委任法を承認し、司教団は三月二八日の告知によってカトリック教徒のナチ党への入党禁止警告の解除を公にしている^③。

これによって果たされた司教団によるナチス政権の承認が、それまでカトリシズム内でもくすぶっていた親ナチ勢力の急激な表面化を惹起したのである。新国家への期待は高まりを見せ、その気運は一九三三年七月二〇日のコンコルダート締結時に頂点に達する。ヴァチカンとドイツ政府との間で締結されたこの条約の内容は、前者によって要求された「宗派組織と聖職者の保護」と、後者によって要求された「カトリック聖職者の政治活動の禁止」の二点に集約されるだろう^④。当時においてものちの研究者によっても両者の協調の最たるものとして捉えられるこのコンコルダート^⑤はしかし、既にナチスに接近していた「褐色の司祭」たち、或いは入党の機会を伺っていた者にとつては重い足かせとなった。というのも、ナチ党内の反教会分子や過激な人種主義的言動への懸念を払拭し切れずにいた司教団は、聖職者の政治的活動の禁止を規定した第三二条がナチ党への入党や肩入れにも適用可能であると判断したからである。それ故入党者は公然と非難され、不遇の時代を乗り越えたかのように見えた「褐色の司祭」たちは再び苦難の道を歩むこととなる。その後の彼らの足跡については次章で扱うこととして、次にこの時期に噴出したカトリシズム内の親ナチ的動向について見てみたい。

(二) カトリシズム内の様々な接近者たち

① 教会上層部

そもそもそうした動きの中には、ヒエラルヒーの頂点である教皇でさえ位置付けることが可能であろう。例えばピウス一世は、一九三三年初頭からヒトラーを賛辞する発言を繰り返していた^⑦。また、少し時代は下るが、ドイツのスペイン内戦介入に対しても明らかに賛同を表明している^⑧。さらに、一九三九年に就任したピウス二世はヴァイマル期にヴァチカン大使としてドイツに滞在していた親独家であり、そもそもコンコルダトは当時ヴァチカン國務長官であった彼が中心となって結ばれたものであった^⑨。近年ではこの両教皇について、その反ユダヤ主義が特に注目されてもいる^⑩。

またドイツ司教団内においてもしばしばナチスへの積極的な支持が見られる。例えばフライブルク大司教コンラート・フォン・グレーバーは「褐色のコンラート」として知られていた人物である^⑪。愛国的傾向の強かった彼はヴァイマル期より既にナチスに関心を示し、その後も教会と共存可能であることを疑わなかったという。一九三三年から一九三八年までの間には親衛隊から特別隊員としての称号を与えられてもいる。また、オスナブリュック司教ヴィルヘルム・ベルニングもナチスを明らかに支持した人物であり、その著作の中では前節で触れたヒトラーの議会演説とコンコルダト締結を賞賛している^⑫。司教である彼がナチスに対して友好的であったことが幸いし、オスナブリュック司教区ではナチス期を通じて他司教区において見られたような激しい「教会闘争 [Kirchenkampf] は生じなかった^⑬。さらに、「安楽死作戦」などには徹底した抗議姿勢を見せていた強硬派の司教たちでさえ、ナチス政権そのものを拒否していたわけではなく、特に愛国的・対外政策については熱烈な支持を送っている^⑭。

とは言え、これら教会上層部がどれほどナチスにシンパシーを寄せようと、彼らのその姿勢は反共産主義や「ヴェルサイユの屈辱」に対する愛国的良心、そして一八七一年以来カトリックに向けられてきた「二級国民」という非難を免れる

ための戦術的な配慮などの結果であった。それらを貫いていたものは「宗派利害の擁護」という大前提であり、これに抵触する政策に関しては教皇も司教団も根強い抗議活動を展開していたのである。この点に、「褐色の司祭」との決定的な違いがあると言えよう。

② 「十字架と鷲」

ヴァイマル期からナチス期にかけてのドイツの政治・思想状況を語る上で見逃せないものとして「ライヒ」思想が挙げられるが、それはカトリシズム内にも大きな影響力を持っていた。ここで言う「ライヒとReich」とは、「神の国」とドイツの政治的伝統としての「帝国」という二つの意味が有機的に統合されたものであり、ヴァイマル共和制に代わるべきアンチ・テーゼとして保守陣営やナシヨナリストたちによって盛んに提唱されていたものである。のちにナチスが使用することになる「第三帝国 Das Dritte Reich」というスローガンはこの思想潮流との関係を抜きにしては語れない。そしてまた、これがカトリシズム内でのナチスへの接近者を生み出す母体の一つともなっていたのである。

そのような動きの代表的なものとして、ヒトラー政権下で副首相を務めていた元中央黨員フランツ・フォン・パーペンを中心に一九三三年四月に結成された「十字架と鷲 Kreuz und Adler」という組織が知られている。文字通りキリスト教とドイツ帝国のシンボルをその名に冠したこの組織は、主に論説や著作による啓蒙活動を行っていたが、結成規約文で謳われたその目的は「ローマ・カトリック教会の中にあり、そしてまたドイツ帝国の偉大なる政治的伝統によっても存在している政治的エネルギーを、現在の国民的高揚にとつても実り多きものにする」ために、「ドイツのカトリックを超党派的に統合する」ことである。つまりこれは、ヴァイマル共和制を打倒すべく権力掌握を果たしたナチスに「第三帝国」建設の夢を託した、或いは、体制内で自らの正しき「ライヒ」思想を普及させてナチスを「馴致」しようとする目論むカトリック勢力の試みであった。カトリックとナチスの「掛け橋」たらんとする意欲は「褐色の司祭」たちと同様のものではあ

たと考えられる。

しかしここで留意すべきは、この組織が宗派問題に対して取っていた姿勢である。元々、キリスト教的普遍帝国としての要素を含む「ライヒ」思想自体は超宗派的志向性を持つものであり、実際に「宗派対立の克服」はここでの主要なキー・ワードの一つとなりえていた。しかしその度合いは論者によって様々であり、カトリック的色彩の強いものから、両宗派の一定の譲歩によって共通の土台を築き上げるもの、そして時には完全なる統一を語るものまであった。そうした中、発起人であるパーベンの考えがどうであれ、組織としての「十字架と鷲」が取っていた立場は明らかにカトリックの優位を示すものであった。そのことは前掲の規約文の後の箇所において、その構成員を「カトリック教会に積極的に参加している者」に限っており、万一プロテスタントの参加を認める場合であってもそれは「カトリックの原則を無条件に守り」「政治的に全く危険のない」者であるとして、ことから即座に読み取ることができる。実際にその構成員はカトリックの保守的な貴族や学者に限られていたという。また「十字架と鷲」は早くも一九三三年一〇月、「カトリック諸組織の保護を明記したコンコルダートの締結によって」結成の際に打ち出した基本的な目標は実現された」として事実上の解散に到っており、そのこともこの組織の宗派的な性質を良く表していると言えるだろう。教会上層部と同様に、やはり宗派主義への固執という点において「褐色の司祭」たちとの相違は容易に認めることができるのである。その後、この組織は「カトリック・ドイツ労働者共同体 Arbeitergemeinschaft Katholischer Deutscher」と改称してナチスの下部組織と成り果てた後、一九三四年九月に解体されている。

③ 神学者

神学者とは、その時代の神学や聖職者たちの思想をリードすると同時に、それらを代表する存在としても捉えることができる人々であるが、その神学者たちの中にもナチスへと接近した者たちがいた。ここではその中から、ヴァイマル末

期には当時の代表的な神学者として名声を博していた三人を取り上げる^②。特に後者二人は、第二次ヴァチカン公会議以降にカトリシズムが取ったエキュメニズム路線の先駆者とされ、しばしば二〇世紀最大の神学者、或いは教会史家とされるほどの人物である。

まずは、当時の教理神学の第一人者とされていたカール・エシユヴァイラーであるが、彼は一九三三年五月にナチ党に入党し、六月には論文「新帝国における教会」を発表してナチス支持を表明している。その中で彼は宗派政党の自己放棄と教会の政治的活動の自粛を訴えているが、具体的には中央党とプロテスタント系の国家人民党を名指しで批判している。なぜなら、彼によればそれらは「議会的性質ではなく、我々の民族の宗派分裂による政治的条件を基礎として成り立っており、「ドイツ帝国を再びヨーロッパのキリスト教的統一の中心にする」という目標を持ったナチス国家にとつて最大の障害となっているからである。彼の主張は三〇年戦争と第一次世界大戦を反ドイツの連合国による条約という結末で重ね合わせながら語る以下の箇所に着眼的に表れている。

ヴェルサイユを取り返すため、そして帝国を維持するために、ドイツに押し付けられたぞつとするような条約、つまり、一六四八年のヴェストファリア条約は現在の国内政治の昂揚の中で乗り越えられねばならない。「支配者の宗教」の最後の残骸が宗教政教なのだ^③。

また彼は、一九三三年七月一日に成立した断種法に関して「カトリックの教義と矛盾するものではない」と積極的に評価しているが、そのことで翌年ヴァチカンから職務停止を通告されている。やがてヴァチカンとの対立が解消しないままに一九三六年病死し、その際僧衣ではなく突撃隊の制服で埋葬され、「ローマの迫害を受けた殉教者」としてナチスの反教会プロパガンダに利用されることとなった。

一九二四年に出版された世界的ベストセラー『カトリシズムの本質 Das Wesen des Katholizismus』の著者であるカール・ヒューダムは、一九三三年の論文「ドイツ民族とカトリック・キリスト教」でヒトラーへの傾倒、カトリックとドイツ民

族の親近性、反ユダヤ主義の積極的肯定を示している。その中でまず彼は、ヴァイマル期のドイツはその苦境にもかかわらず諸政党は無為な喧騒に戯れるのみであり、もはや外部からではなくドイツ民族内部からの変革によるのみ改善が可能であったと述べる。そしてそのような状況の中でヒトラーこそが「我々の感情と理性の声が求めていた者として、そして我々に誤りを悟らせ、政治・経済・社会・宗派的な装いを全て横切る真実を見させ愛させる、ドイツの守護神の解放者として我々の前に立っている」として高く評価している。^{②④}つまり彼の場合もエシユヴァイラーと同様、やはり宗派を超え存在としてヒトラーとナチ党を捉えているのである。超宗派へのアダムの志向性は、一九三四年の講演の以下の箇所からも読みとることができよう。

ルターの時代以来、ドイツ人の魂を深く広い亀裂が走ってきた。：「中略」：しかし我々ドイツ人は教会分裂にもかかわらず、お互いの中で出会う究極の精神的共同体を持っている。：「中略」：キリストへの信仰こそがドイツ人の生命と聖なる国家の泉であり、お互いが兄弟と呼び合えるカトリックとプロテスタント共通の故郷である。^{②⑤}

彼はその後一九三九年一月にはアーヘンでの学術講演会で、反ユダヤ主義やカトリックの戦争協力の必要性などを訴えている。^{②⑥}

次に見るヨゼフ・ロルツもやはり一九三三年、『教会史』第二版に付録した小冊子「ナチスと教会」の中でナチスの魅力を率直に語っている。

ドイツに負わされた最も深い傷は宗派分裂である。一五一七年以来、この分裂が乗り越えられる可能性がナチスによって初めて現れているのである。つまり、ナチスの生命線である国民的思考によってである。ナチスは全ての階級・種族・地域のカトリックとプロテスタントを、カトリックとして或いはプロテスタントとして包み込むのではない。むしろ第一に示されるのは、内的で深い、宗派を超えたドイツ民族の一体性である。^{②⑦}

ロルツによれば、司教団も認める国民的な教会統一という目標においてナチスとカトリック教会は一致しており、故にカ

トリックは新国家に進んで参入しなければならないのである。同様のことは同年の『ナチスへのカトリックの接近』、中央党系日刊紙での一九三四年の短期連載など、多数の出版物から窺うことができる^{②③}。また彼は、先述の「十字架と鷲」への入会、ナチ系出版社のシリーズ「帝国と教会 Reich und Kirche」での執筆など、多くの親ナチ組織と関わっており、そのため戦後はイギリス軍によって一時免職処分に処されている。

これら三人の神学者たちはともに、宗派分裂克服の可能性への期待からナチス国家を支持していたと言えよう。その点において「褐色の司祭」たちと同じ立場にあったのである。

（三） カトリシズム内での「褐色の司祭」

以上で見た接近者たちはナチスによって支援を受けながらそれぞれに政治活動を行っていたのであるが、では、それらと「褐色の司祭」たちはどのような関係にあったのだろうか。

親ナチ派の司教たちに関しては、彼らがどれほどナチスを好意的に捉えていたとしても、彼ら自身とは違う論理の下にナチスを支持し、そしてまた聖職者のナチ党への入党禁止という司教団全体の決定に従う意思を見せない「褐色の司祭」たちを支持したとは考え難い。当時の司教団において指導的な役割を果たしていた大司教フアウルハーバーが「褐色の司祭」たちを「教会の敵に雇われ称揚されている背教者たち」と厳しく非難していることを考えれば^{②④}、これはなおさらである。「褐色の司祭」たちがカトリック・ヒエラルヒーの中で陥っていた苦境は、以下のようにナチ党によっても観察されていた。

国民社会主義を公然と支持するカトリック聖職者は少ない。彼らはその信念の故に、同僚や教会当局から迫害されている。^{②⑤}

「十字架と鷲」の構成員や神学者たちに関しては残念ながら、彼らが「褐色の司祭」をどのように見ていたのかを直接的に物語る史料は管見の限りでは見当たらない。だが「褐色の司祭」の側が彼らをどのように捉えていたのかについては、

第一章で見たヨゼフ・ロートが一九三三年二月一〇日、ナチ党のイデオログであるアルフレート・ローゼンベルクに宛てた手紙の中に見ることができる。彼はその中で「十字架と鷲」に所属していた数人やパーペン、ロルツなどを含む神学者たちを名指しで列挙し、以下のように語る。

彼らは一年前、一体どこにいたのでしょうか? …〔中略〕…これらの人々は一年前には、そして私やピーパー、ホイザーらがカトリック陣営から仲間を探していた三年前、いやもっと前には一体どこにいたのでしょうか?

おそらくロートが示したこの不快感は、単に新参者に対する古参の嫉妬心からだけではない。なぜなら「褐色の司祭」たちがナチス期を通じてここで挙げられている接近者たちと接触を持っていた形跡は、体制崩壊後六〇年を経た現在まで確認されていないからである。前節で見たそれぞれの接近者たちのナチスへの期待を考慮するならば、このことは親ナチ派の司教や「十字架と鷲」の構成員に関しては納得のいくことである。ここではナチスへの傾倒はあくまで「カトリックの」利害を求めていることであり、「褐色の司祭」たちがヴァイマル期より訴えてきた「宗派対立の克服」に対して積極的な肯定は見られないからである。ではしかし、神学者たちとはなぜ接触が見られなかったのだろうか。このことを明らかにするために、次章ではナチス体制下における「褐色の司祭」の具体的な活動に眼を向ける。

- ① Lewy, *aaO.*, S. 13.
- ② Denzler/Fabritius, *aaO.*, S. 259f.
- ③ Ebenda, S. 260ff.
- ④ コントラート全文は以下に掲載。Stasiewski, B. (Bearb.), *Akten deutscher Bischöfe über die Lage der Kirche 1933-1945*, Bd. 1-3, Mainz, 1968-1979 (以下、*Bischöfe*と略記) Bd. 2, S. 405-416.
- ⑤ しかしコントラートがのカトリック教会について持った意味については、長らく論争をまわっている。河島「政権掌握」三三四—三六頁。
- ⑥ Spicer, *aaO.*, S. 142.
- ⑦ 河島「政権掌握」二〇頁。
- ⑧ Lewy, *aaO.*, S. 205f.
- ⑨ ヴォムス二世の親ナチ的態度については、Cornwell, J., *Hitler's Pope*, New York, 1999.
- ⑩ Kertzer, *aaO.*; Cornwell, *aaO.*
- ⑪ 以下、レーバーに引用して、Denzler, *aaO.*, S. 147ff.
- ⑫ Bering, W., *Katholische Kirche und Deutsches Volkstum*, München, 1934, S. 41.
- ⑬ Wilken, H., Die katholische Gemeinde in (Alt-)Hamburg, *Zeitschrift des Vereins für Hamburgische Geschichte* 85(1999), S. 127-142.

- ⑭ Lewy, *aaO.*, S. 176ff.
 ⑮ ナチスとカトリック教会の対立的側面に關しては Gotf/ Reppen, *aaO.*
 ⑯ 以下、「ライヒ」思想とカトリシズム、「十字架と鷲」に關しては特
 に記さない限り、Breuning, *aaO.*
 ⑰ 規約全文文は以下に掲載。Eberda, S. 330f.
 ⑱ 当時パーソンは「ライヒ」思想の代表的論者の一人であったエー
 ガー・ユリウス・ユンクの助言の下に、新体制内でペトラーを「驅
 致」する方針を採っていたといふ。小野清美「保守革命とナチズム」
 名古屋大学出版会、二〇〇四年、三二〇頁。
 ⑲ パーソンに影響を与えていたユンクは、前文第三者の立場であった。
 同書、一八五頁。
 ⑳ Breuning, *aaO.*, S. 340.
 ㉑ 本稿で扱う神学者たちの経歴については特に記さない限り、それぞ
 れ以下を参照。カール・エムシェヴァイラー（一八八六一一九三七）は
 Lewy, *aaO.*, S. 108f, 261; Scholder, *aaO.*, S. 425, カール・メアム
 （一八七六一一九六六）は、Krieg, R. A., *Karl Adam*, Notre Dame,
 1992, ヨゼフ・ロルツ（一八八七一九七五）は、Luzern, V. C.,
 Joseph Lortz, *Geschichte und Gegenwart* 9(1990), S. 247-278.
 ㉒ Eschweiler, K., *Die Kirche im neuen Reich, Deutsches Volkstum*

第三章 ナチス体制下の「褐色の司祭」

(一) ナチスの宗教政策と「褐色の司祭」

ドイツ社会における「宗派対立の克服」を目指す中でナチ党に接近した「褐色の司祭」たちの活動はその後どのように

- 1(1933), S. 451-458, 452f.
 ㉓ Eberda, S. 452.
 ㉔ Adam, K., *Deutsches Volkstum und katholisches Christentum, Theologische Tübinger Quartalschrift* 114(1933), S. 40-63 (ZfL Volkstum-² 42).
 ㉕ Adam, K., Vom gottemenschlichen Erlöser, in: *Glaubensstige und Glaubenswalfahrten*, Paderborn, 1934, S. 11-24, 22.
 ㉖ Keidler, H., Karl Adam und der Nationalsozialismus, *Rottenburger Jahrbuch für Kirchengeschichte* 3(1983), S. 129-140.
 ㉗ Lortz, J., Nationalsozialismus und Kirche, in: ders., *Geschichte der Kirche*, 2. Aufl., Münster, 1933.
 ㉘ Lortz, J., *Katholischer Zugang zum Nationalsozialismus*, Münster, 1933 (ZfL 2 42 43); ders., Katholisch und doch nationalsozialistisch, *Germania*, vom 28. Januar 1934; ders., Katholischer Zugang zum Nationalsozialismus, *Germania*, vom 4. Februar 1934; ders., Unser Kampf um das Reich, *Germania*, vom 6. Mai 1934.
 ㉙ Bleistein, Überlauter, S. 71.
 ㉚ Boberach, H., *Berichte des SD und der Gestapo über Kirchen und Kirchenvolk in Deutschland 1934-1944*, Mainz, 1971, S. 23.
 ㉛ Bundesarchiv, NS8/108.

展開されたのか。そしてまた、同様の動機からナチス国家を支持した神学者たちと彼らが連携して活動を行うことがなかったのはなぜなのか。これらの問いに迫るためにも、まずはナチスの宗教政策とその中の「褐色の司祭」の活動を追うことから始めたい。

ヒトラーは全権委任法採決直前の演説で、体制下での両宗派の利害保障を高らかに宣言し、その公約はカトリック教会に関してはコンコルダト締結によって果たされたかのように見えた。その間、カトリック勢力内の様々な場所でナチス国家を賛辞する声が上がっていたことは前章で見たとおりである。しかしそもそも、組織と世界観の双方における国民の徹底した全体主義化へと向かうナチズムの国家構想の中には、同様の機能を持つていたとも言えるカトリック教会の存続余地はなかった^①。つまり、政権初期のナチスの融和的な対応は偽装行為に過ぎなかったのである。それ故、既に一九三三年春以降からカトリック諸組織や聖職者に対する抑圧や迫害は水面下で行われており、またアルフレート・ローゼンベルクを中心としたナチ党内の反カトリック勢力もさかんに批判活動を展開していた^②。コンコルダト締結後も司教団がその懸念を払拭し切れず、「褐色の司祭」たちを咎めた所以である。

とは言え、カトリック住民が優勢を占め、第一次世界大戦後は国際連盟の管理下にあったザール地方がその帰属をめぐる住民投票を一九三五年一月に控えていたため、ナチスがカトリック教会に対する組織立った政策に本格的に着手し始めるのは一九三五年以降のことである。それらは「公的生活の非宗派化 *Entkonfessionalisierung des öffentlichen Lebens*」というスローガンのもとに打ち出され、当時ドイツの政治・社会のあらゆる領域において展開していた宗派系連盟組織を排除、又は統合し、ナチス系の組織一つにまとめるというものであった^③。こうした組織はコンコルダトにおいてその保護が明記されていたのであるが、ナチス側はこれらは政治・公的次元に強く影響を及ぼすものであり、また、その組織内での聖職者の活動がコンコルダト第三二条に違反するものであるとみなしたのである。しかし司教団は、これらの連盟組織は教会と信徒たちを結びつける重要な柱であり、政党以外は全て信仰活動の一端であって決して政治的活

動を行うものではない、と激しい抗議活動を行った^④。換言すれば、ヴァイマル期よりナチ党が喧伝してきた「積極的キリスト教」というレトリックが「公的生活の非宗派化」という論理にすりかえられていく中で、ナチスと教会の間で「政治・公的領域」についての解釈をめぐる争いが起きていたのである。

そうした中で「褐色の司祭」たちはカトリック司祭としての知識・経験・人脈を利用しながら、ナチス側における教会の専門家として活動していたのである。とりわけ教会側から警戒されていた者として、第一章で見たアルバン・シャハライターとヨゼフ・ロート、そしてアルベルト・ハートルという人物がよく知られている。シャハライターは一九三三年二月の司教団批判以降教会当局との関係は悪化していたが、執筆活動や演説などを通してナチスの政策を支持し続けた。また彼はヒトラーを始めとするナチ党幹部からの信頼も厚く、毎年ナチ党大会には来賓として出席している。ロートもまた一九三三年以降もナチスの政策を支持する言動を繰り返しており、一九三四年にはナチ党系の高等学校の宗教授業担当の講師に、そして一九三五年に教会政策の主要担当機関として帝国教会省が新設されるとそのカトリック部門長官に抜擢されている。また、既にヴァイマル期よりナチ党に接近していたハートルは、一九三三年五月に入党し、一九三四年には親衛隊長官ヒムラーの腹心であるハイドリヒのもとで、親衛隊の諜報機関である保安諜報部 *Sicherheitsdienst* のカトリック部門長官に就任している。彼はそこで多くのカトリック聖職者をスパイとして雇い、そこで得た機密情報を教会省のロートに、或いは反ナチ的な聖職者を強制収容所へと送り込むために親衛隊に提供している。このように「褐色の司祭」たちの中には、「公的生活の非宗派化」というナチスの教会政策において中心的な役割を果たしている者すら存在したのである。

（二） 神学者たちの立場

「褐色の司祭」たちがこのような活動を行っていた一方で、ナチスを支持した神学者たちはどのような態度を取ってい

たのか。先に見た三人の神学者はともに、新国家において教会が採るべき方針として政治的カトリシズムの否定と教会の政治・公的領域での活動の禁止を挙げていたが、これは「公的生活の非宗派化」を肯定するものだったのだろうか。これに関しても残念ながら直接的な史料は手元にはないが、彼らの著作からその立場を推測することは可能である。

まずカール・エシュヴァイラーについてであるが、先に見たように、彼にとって宗派对立を克服する上で必要な作業は宗派政党を排除することであった。それ故、批判の矛先は中央党と国家人民党という政党活動に限定されている。そもそも彼はカトリシズムとナチズムの世界観にはならぬ矛盾することはないと指摘しており、カトリシズムの要とも言える宗派系連盟組織の排除までは考慮していなかったのである。ヨゼフ・ロルツもまた、一九三三年の小冊子『ナチスへのカトリックの接近』の以下の箇所から、同様であったと考えて差し支えないだろう。

文明化された全ての世界で見受けられる〔フランス革命以来続いてきた非政治化という〕この一九世紀の教会の路線に対して、ドイツ（そしてベルギー・イタリア・ポーランドにおいても）の政治的カトリシズムは例外を成してきた。もはや彼等が存在すべき理由はない。：〔中略〕：特に宗派政党を否定するということの中に示されているように、ナチス国家の全体的要求は教会の発展にとつて害をなすものではなく、むしろその完遂に貢献するものである^⑥。

また、アダムに関しては論文「ドイツ民族とカトリックのキリスト教」の中の以下の箇所から、彼が明確に諸連盟の保護の必要性を認めていることが分かる。

司教団の「カトリック青少年組織・職業連盟・カリタス連盟はキリスト教の訓練学校として維持せねばならない」という要求は、：〔中略〕：ただの支配欲ではなく、以上の「諸連盟は民族とカトリックの親近性を保つために必要なものであるという」教義的な前提条件から理解されねばならない^⑦。

このように三者がナチスに寄せた期待は、政治領域における非宗派化によって宗派对立を克服するというものであり、社会領域にまで及ぶ非宗派化、つまり連盟組織の廃止までは認めていなかったのである。彼らのこの立場は、連盟組織や

その中で、の聖職者の活動はナチスが指摘するような「政治的カトリシズム」ではなく「宗教的カトリシズム」である、との司教団の解釈に近い^⑧。また、年を追う毎に彼らがナチスへの賛辞を高らかに謳う活動から身を引いてそれぞれの神学研究に没頭していったことから、^⑨「公的生活の非宗派化」によって推進されるナチスの宗教政策を否定的に捉えていたことは間違いない。ここにおいて「褐色の司祭」たちとの相違点が存在し、そして彼らとの連帯活動の軌跡が見られないことも理解できよう。

(三) 「褐色の司祭」が目指した教会像

以上のように三人の神学者たちはナチスとは距離を置くようになったが、これは彼らがナチ党のスローガンの裏には事実上の反教会・反カトリック性が潜んでいることを看取した結果だとも言えよう。しかし「褐色の司祭」たちもまたこの性質に対して盲目であったわけではない。では、彼らはどのような論理の下に「公的生活の非宗派化」を支持し続けることができたのだろうか。

まずはアルバン・シヤハライターの例であるが、彼はナチスの一連の宗教政策によって「教会は何も失ったわけではない」としながらも、その一方でナチスとカトリック教会の関係が悪化していくことに戸惑いを覚えていた。しかし彼の場合、その懸念はヒトラーやナチス国家そのものに対してではなく、党内の明らかな反カトリック勢力への批判となっていたのである。それ故彼はロレンツ・ピーパーに宛てた手紙の中で、自分たちの使命は「これらの勢力と均衡をとるものを党内部で築き上げること」であると語り、^⑩また、司教団によって批判の的となっていたローゼンベルクの『二〇世紀の神話 Der Mythos des 20. Jahrhunderts』の一部を修正すべきであると党幹部に進言している。これらの措置が功を奏すことはなかったものの、しかしヒトラーに対する彼の情熱が衰えることはなかった。一九三五年以降、彼のもとに多数寄せられるようになっていたカトリック教会とナチスの共存可能性を疑う声に対しても、そうした懸念は「総統への揺ぎな

い忠誠」によって取り除かれるものと簡潔に答えている^⑮。そして一九三六年一月にナチスによって催されたシャハラライターの七五歳の誕生日を祝う式典での以下の演説に見られるように、やがてヒトラーへの賛辞の際には宗教的な意味付与さえ行うようになっていた。

ナチス新帝国においても我々信心深いカトリックならびにプロテスタントのキリスト教徒はまったく自由であり、信仰活動と信仰告白は守られている。…〔中略〕…ドイツ民族にアドルフ・ヒトラーをその指導者として与えた神を讃えようではないか！彼にはドイツの救済という事業を完遂する恩恵が与えられているのだ。^⑯

このように、「公的生活の非宗派化」が引き起こす喧騒は彼の心の中に少なからぬ不安を生じさせたが、しかしそれはヒトラーのカリスマへの絶対的な信頼によって超越され、消化されているのであった。やがて彼は一九三七年六月に病死し、「偉大なドイツ人修道院長」として国葬が執り行われている。

一九三五年以降教会省においてヨゼフ・ロートが全力を挙げて取り組んだ仕事は、コンコルダート破棄の試みであった^⑰。彼はその理由を一九三六年一月に教会省大臣ケルルに提出した建白書の中で列挙しているが、それを要約すれば、「(コンコルダートは) a 議会主義・自由主義的なヴァイマル期の産物である。b この三年の国内制度の変化によって既に時代遅れのものとなっている。c ナチスの秩序・立法の強化を妨げる。d 少数派であるカトリックの利害をプロテスタントよりも優先する。e カトリック教会を国家内国家としてしまう。f ナチスの思考様式ではなく、ローマ・カノン法に基づいたものである」となる。そして最後に、これらの欠点を持つコンコルダートを破棄して「初めて、プロテスタントとカトリック両教会が同等な地位を得るということが可能となる」と彼は述べている。結局、外交上の影響への考慮や戦争の勃発によってこの試みが実現されることはなかったが、宗派平等化への彼の思いは、シャハラライターの死の直前に側近に発した「ロートは〔両宗派統合の〕国民教会の創設を目論んでいる」との警告からも窺うことができよう。しかしロートが目指していたものはそれだけにとどまらない。一九三五年以降、彼は偽名による多数の執筆活動を行っているが、その

中の論説「教会はもはや年老いている」において、「ナチスの到来によって組織的な無信仰は死に絶え、キリスト教的なドイツ民族の生命と魂を保つことはできた」が、もはや教会自体は中世のように力を發揮することなく「徐々に死んでいくだろう」として、激しい教会批判を行っていたのである。ここからは彼が、文化的特質としてのキリスト教の存続は積極的に認めているものの、組織としての教会はもはや不要であると考えていたことが分かる。それ故、この教会批判がナチスの反宗教的なそれとは本質的に異なったものであるにもかかわらず、彼は「公的生活の非宗派化」との利害一致を見出すことができたのである。教会からの激しい批判の中にあってもロートが宗教的情熱を失っていなかったことは、彼が一九四一年に事故死した時、最も親しい同僚であったアルベルト・ハートルが「死ぬまで信仰篤いカトリック司祭であった」と評していることから明らかである。^⑩

最後に、アルベルト・ハートルについて見てみたい。彼の保安課報部内での主な活動はナチスの教会政策にとつて必要な機密情報を収集することであったが、その傍ら、それらの情報をもとにした論文や書物を様々な偽名を使って執筆している。それらの中で彼は「政治的カトリシズム」の批判に終始しているが、その中心として宗派系連盟組織の存在を指摘している。以下は一九三九年の著作『司祭権力』からの引用である。

全公的生活への侵入に奉仕するこれら〔教会系〕の連盟によって、純粹に宗教的な祈りのための連盟や信心深い兄弟団は全く影が薄くなってしまう。^⑪

また、一九四〇年に刊行した自伝的作品『神の法』では徹底的な教会批判を試みている。

ペーター〔ハートルのこと〕は以前より神をはるかに近く感じていた。彼が全能なる神との正しい関係を持ちたいと望んだ時、彼には教会や儀式といった回り道、そして司教や教皇といった手続きを取る必要はなかった。彼はもはや教会法・典札上の規則によつて神から遠ざけられてはいなかった。^⑫

このようにハートルは、社会との接触を絶ち、完全に信仰活動のみに関わる教会を創設するという目標において「公的生

活の非宗派化」と重なる論理を展開していたのである。しかし彼もまたシャハライターやロートと同様に、その活動は自身の宗教観に基づいたものであった。

ペーターはいまや、聖職者たちが真の神の前から、そして教会がかつて占めていた場から退かねばならない一方で、ドイツ人は彼ら自身の中にある神の声、つまり彼らの血の声を聞き、理解し、話すという時代の到来を感じていた。^②

ハートルの宗教観とは、「民族」と「血」によって語られる自然崇拜的な「神」の概念に基づいたものであった。

ここでは三人の代表的な「褐色の司祭」たちの言動とその教会像について検討したが、例えばシャハライターやハートルとの間のように、彼らが抱いていた宗教観やカトリック教会への思いには時には顕著な違いも見られる。しかし三者とともに、反教会・反カトリック的性質を露にしたナチスのまさにその内部で自身の理想の教会像を追及するという「綱渡り」の中で、ナチス体制下における「褐色の司祭」たちの苦境と軌跡を体現した存在だったのである。

(四) 「褐色の司祭」たちの末路

ナチス期における「褐色の司祭」たちの活動は以上のような論理の下に展開されていたのであるが、彼らはその後どのような運命を辿ったのだろうか。前節で見たようにシャハライターとロートは夢半ばにしてその生涯を終えているが、しかし彼らはまだ幸せであったと言えよう。なぜなら、大抵の他の「褐色の司祭」たちは戦後、重い十字架を背負って残りの人生を歩まねばならなかったのである。

第一章で見たフィリップ・ホイザーはその後もアウグスブルク司教区内でナチスを支持し続けていたが、そのことで司祭職を停止され、また、戦後は非ナチ化政策の中で起訴・有罪判決を受けて強制収容労働所に送られている。高齢のため短縮されたその服役期間を経たのち、一九六〇年に死亡した。^③同じく第一章で見たヴィルヘルム・ゼンについてナチス期以降の詳細は明らかではないが、おそらくホイザーと同様の戦後を送ったと思われる。

アルベルト・ハートルは一九四一年にスキヤンダルがもとで保安課報部内での地位を追われた後、第二次世界大戦中には東欧の前線地域を転々としている。一九四五年にアメリカ軍によって拘束・抑留され、ナチ党内部についてのその豊富な知識から戦後数多くの裁判に証人として出廷している。また、既に抑留されていた時期から盛んな執筆活動を再開しており、ナチス期の自身の行動の正当化や、「ドイツ・ユニテリアン Deutsche Unitarier」という超宗派的キリスト教セクトの宣伝につとめたのち、一九八二年に死亡した。

最後にロレンツ・ビーパーの例であるが、彼もまたナチス期には地方において積極的にナチス支持を続けていた。しかし一九四一年に彼が勤務していた病院で「安楽死作戦」の被害者が出たことに対し抗議活動を行ったため、翌年にはその職を奪われている。戦後には司祭職への復帰を何とか果たすものの、非ナチ化の流れの中で信徒による相次ぐストライキ、或いは苦情が司教庁へ殺到するなど、一九五一年に死去するまで過去の言動の暗い影に付きまわれ続けた。

- ① ビトラーは私的な場ではしばしば、ナチ党の国民教化の際にはカトリック教会を模範とすべく、それ故に両者は競合し共存しななうことを語り、Rauschning, H., *Hitler Speaks*, London, 1939 (船戸満之訳『ビトラーとの対話』學藝書林、一九七二年)；Trevor-Roper, H. R., *Hitler's Table-Talk*, London, 1953 (吉田八尋監訳『ビトラーのテーブル・トーク一九四一―一九四四』三交社、一九九四年)。
- ② Gott/ Rengen, *aaO*, S. 99-104.
- ③ 詳細については Bestier, *aaO*, S. 222-235.
- ④ この時期の司教団の数多くの抗議文書は以下に掲載。Stasiewski, *Bischöfe*, Bb. 2, 3; Volk, L.(Bearb.), *Akten deutscher Bischöfe über die Lager der Kirche 1938-1945*, Bd. 4-6, Mainz, 1981-1985, Bd. 4.
- ⑤ Eschweiler, *aaO*, S. 456.
- ⑥ Lortz, *Zugang*, S. 8f.
- ⑦ Adam, *Volkstum*, S. 54f.
- ⑧ Stasiewski, *Bischöfe*, Bd. 2, S. 334f.
- ⑨ 特にロルムに関するものは顕著である。
- ⑩ Engelhard, G., *Abt Schachlitz*, München, 1941, S. 182.
- ⑪ Tröster, *aaO*, S. 71.
- ⑫ Engelhard, *aaO*, S. 165.
- ⑬ Ebernda, S. 170.
- ⑭ 彼は既述一九三三年二月一〇日ヒローゼンベルクに宛てた手紙の中でロルムターへの批判を行っている。Bundesarchiv, NS8/108.
- ⑮ 樋口哲夫博士の解説。Brandl, *aaO*, S. 443f.
- ⑯ Bestier, *aaO*, S. 336.

- ①② 註⑨を挙げる文献以外にも筆者が参照したものに Berg, W., Zwei Jahre Reichskonkordat, *Deutscher Glaube*, Hefte 7(1935), S. 314-320; Richter, A., Parteiprogramm der NSDAP und Reichskonkordat, *Deutschlands Erneuerung* 20(1936), S. 464-470; ders., Das Verhältnis zwischen dem Staat und der römischen Kirche, *Deutschlands Erneuerung* 20(1936), S. 736-740.
- ③ Berg, W., Die Kirche ist alt geworden, *Deutscher Glaube*, Hefte 3(1935), S. 125-127.
- ④ Besier, *aaO.*, S. 997.
- ⑤ 註⑤、⑥を挙げる文献以外にも筆者が参照したものととして Albert,

- G., Der politische Charakter der Katholischen Aktion, *Nationalsozialistische Monatshefte* (November 1935), S. 999-1011; ders., Das Vereinswesen der römischen Kirche, *Nationalsozialistische Monatshefte* (Januar 1936), S. 12-26; Schwarz, D., *Angriff auf die nationalsozialistische Weltanschauung*, München, 1936.
- ⑥ Holzner, A., *Priestermacht*, Berlin, 1939, S. 31.
- ⑦ Ders., *Das Gesetz Gottes*, Berlin, 1940, S. 98.
- ⑧ *Ebenida*, S. 100.
- ⑨ Bleistein, Überläuter, S. 87.

おわりに

先行研究において「例外的なアウトサイダー」「少数の裏切り者」とされてきた「褐色の司祭」像は、以上の考察を踏まえてどのように修正されるべきであろうか。

まず第一章では彼らがまだ「褐色」ではなかったヴァイマル期における活動を追ったが、そこからは彼らが教会政治的目標を模索する中でナチ党へと接近した姿が浮かび上がってきた。従来強調されてきた強烈な「愛国主義」や「反ユダヤ主義」的言動は、ドイツ社会における「宗派対立の克服」という目標の産物、或いはそれを補完するものだったのである。そしてその動機は、カトリシズム内での「褐色の司祭」の位置付けを探った第二章において、当時著名であった三人の神学者たちと同様のものではなかったことが明らかになった。これらのことは、「褐色の司祭」が数量的には下級聖職者内での「例外的アウトサイダー」であつたとしても、当時のカトリシズム全体の中に位置付けた時、質的には決して「例外的」存在ではなかったということを示している。^⑩

また、同様の動機からナチスに接近したにもかかわらずその先に実現するべきであったそれぞれの教会像の違いから、三人の神学者たちはやがてナチス礼讃から身を引き、一方で「褐色の司祭」たちは自らの意思を貫く危うい「綱渡り」を試みていたことは第三章で見たとおりである。彼らは教会ヒエラルヒーからの疎外にもかかわらず一貫して教会政治上の動機に基づいた活動を行っており、宗教的情熱も失ってはいなかった。「褐色の司祭」という存在を把握するためには、「裏切り者」或いは「背教者」という教会当局の診断を現在においてもそのまま受け入れるだけでは不十分であり、むしろ、カトリック教会の既存の政治路線の改革を目指した「教会政治家」としての性質にも眼を向ける必要があるだろう。とは言うものの当然、他の「褐色の司祭」の全てが本稿で取り上げた者と同じ動機のもとに活動していたという保証はない^②。しかし当時のドイツのカトリック世界において数少ない社会的上昇手段の一つであった「司祭職」を手にした者たちが、唯一絶対の教会ヒエラルヒーからの疎外という危険を冒してまでナチスに接近した時、多くの場合においてそこには体系的なイデオロギーに基づいた動機があった筈である^③。その際、本稿で取り上げたイデオログたちの中にその典型例を見出すことは的外れなことではないだろう。

本稿で行った「褐色の司祭」についての以上の考察と評価は、ナチス期、そして近代におけるカトリック教会に関する研究史に対しても、以下のような新たな視点と課題を提示するものと筆者は考える。すなわち第一に、数量的データから導き出されている「大多数の聖職者はナチスと対立していた」というテーゼの見直しである。たしかにナチ党への接近を実行した聖職者たちの数は迫害を受けた者のそれに比べれば、極めて少ないものである。しかしそれはカトリック聖職者たちが服従の義務を負っていた司教団が、ナチ党への接近を禁じていたという条件のもとでのことである^④。それ故、数量的データのみによってナチスへの態度を断定するのではなく、質的な検討を行うことも必要である^⑤。その際、例えば本稿で扱った「褐色の司祭」や神学者が共有していた「宗派對立の克服」というモチーフが、当時の聖職者や神学者内で持ちえた影響力を問うという方法は有用であろう。「褐色の司祭」とはナチス体制下において袂を分つたとは言え、「十字架

と驚」に代表されるような「ライヒ」思想の諸潮流においても「宗派對立の克服」が主要なキー・ワードの一つとなりえていたことは、この点で興味深い事実である。また言うまでもなく、本稿では扱えなかった、地方において活動していた「褐色の司祭」たちや、他のナチスへの接近者たちの具体的諸相や相互関係についての更なる研究の進展も望まれる。

第二に、近年盛んなミリュール研究によって度外視されてきた、謂わば「もう一つのカトリシズム」へのまなざしである。例えば、一九世紀以降のウルトラモンタニズムの確立によってカトリック聖職者たちはプロテスタントに比べはるかに嚴格に規律化され、教区や宗派系連盟組織内でリーダーシップを執ることでカトリック・ミリュールの確立に貢献したとするのがそこでの一般的な見解である。しかし本稿で描き出した「褐色の司祭」の姿はこれとは全く対照的である。また、教会史のいくつかの研究においては、ウルトラモンタニズムの展開は同時にその傾向に反対する教会内の勢力を常に生み出してきたことが指摘されてきた^⑦。それらは時には教会内での改革を目指す運動であり、そして時には独立した教会組織を設立する運動ともなっていた。そこに共通して見られる特徴が、宗派對立への批判とドイツ・ナシヨナリズムへの傾倒であつたことを考え合わせれば、「褐色の司祭」たちを、ウルトラモンタニズム或いはカトリック・ミリュールへのアンチ・テーゼとしての「もう一つカトリシズム」を二〇世紀において体現していた存在として位置付けることも可能ではないだろうか。その際、彼らの思想的な背景として想定されるのは、第一次世界大戦時にドイツ社会を席卷した超宗派ナシヨナリズム^⑧と、ヴァイマル期カトリシズムの神学・政治・思想的基盤を形成したとされる「改革カトリシズム Reform-katholizismus」^⑨である。

いずれにせよここで挙げた問題は、筆者自身にとつての課題でもあり、それらへの挑戦には他日を期したい。

- ① また、本稿では紙幅の都合上取り上げることはできなかったが、この三者の他にもちのエキユメニズムの先駆者とされる神学者が同様
- ② 例えば「はじめに」の註⑩で挙げたファンデルが扱っているシユバ

イアー司教区における事例の中では、アルコール依存や独身制への不満など司祭としての適応不能性から司祭職を放棄した者や、共同体と司教庁との争いに巻き込まれる中で教会組織への幻滅を抱きナチスへと接近した司祭の例も見られる。

- ③ 社会的上昇手段としての「司祭職」が持った意味については、野田、前掲書、一三三—一四四頁。望田幸男「資格社会におけるある苦闘物語」同編『近代ドイツ—資格社会の展開』名古屋大学出版会、二〇〇三年、三三四—三六一頁。
- ④ 実際、戦後のハートルの供述から当時二四〇—四八〇人のカトリックのスパイが存在していたことが推測されている。Dierker, *aO.*, S. 368.
- ⑤ またそもそもヘールの統計資料集には、親ナチ態度を取っていた人物も被害者として数えられているケースがあることも付言しておく。例えば本稿で取り上げたカール・アダムはその一人である。Hehl, *aO.*, S. 1321.
- ⑥ 例え³⁴ Blaschke, O., *Die Kolonialisierung der Laienwelt*, in : ders. / Kuhlmann, F. M.(Hg.), *Religion im Kaiserreich*, Gütersloh, 1996, S. 93-135.
- ⑦ 例え³⁵ Hagen, A., *Der Reformkatholizismus in der Diözese Rottenburg*, Stuttgart, 1962; Conzemius, V., *Katholizismus ohne Rom*, Zürich, 1969; Weiss, O., *Der Modernismus in Deutschland*, Regensburg, 1995.
- ⑧ Krumeich, G./Lehmann, H.(Hg.), “*Gott mit uns*”, Göttingen, 2000.
- ⑨ これは世紀転換期頃にヨーロッパ・レビューで展開していた「近代主義 Modernismus」のドイツにおける亜流とされるものである。Hagen, *aO.*; Weiss, *aO.*
- 【本稿は、平成一八年度文部科学省科学研究費補助金（学術振興会特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。】

government officials recommended government operation of the railroads instead of private operation like the RWB. For example, the Secretary of the Treasury William G. McAdoo advised the President to take control of the railroads as a war necessity. But Wilson hesitated to take over the railroads mainly because of the legal and financial problems associated with it. As a result, Wilson pondered the question for 3 weeks despite the chaotic condition of the transportation system.

The third chapter discusses the voluntary effort by the RWB in the chaotic condition. The traditional railroad magazine, *Railway Age Gazette* (RAG), described how the rate increase and the repeal of the Anti-trust Acts were required by the railroad industry from November. But these requirements would not be realized as usual. Then, the RWB formed the Committee of Vice Presidents (CVP), on November 24, to relieve congestion. All facilities on all railroads east of Chicago would be pooled and operated under the CVP. The CVP issued various orders such as the traffic diversion to the south and the embargo on all export steel. Encouraged by these activities, RAG articles again recommended private operation of the railroads despite the ICC report. However, it was regrettable to the industry that the infant CVP could not remove the interventions of other agencies.

The concluding chapter evaluates the creation of the Railroad Administration. Wilson was finally persuaded by officials to take control of the railroads, and appointed McAdoo as the Director-General of the railroads. This move by Wilson seems to be one step toward statism. But the Railroad Administration gradually met the requirements of the industry. Any orders made by McAdoo would have paramount authority over the Anti-trust Acts and the ICC rate regulation. By stationing representatives in the government agencies, he overrode their priorities. As a result, most of the Railroad Administration staff consisted of the RWB staff. Therefore, the aim of this paper is to show how the mutual compensation of voluntary cooperation can benefit unified railroad operation.

Die „braunen Pfarrer“ und die katholische Kirche in der NS-Zeit

von

SHIMADA Hayato

Gemeinhin denkt man, dass die katholische Kirche in der NS-Zeit durch die feste Hierarchie vom Papst über die Bischöfe bis zur niederen Geistlichkeit und die Weltanschauung dem Nationalsozialismus widerstand. Zudem haben die

„Milieu-Forschungen“ in den etwa letzten zwanzig Jahren dazu geneigt, den Katholizismus in der Moderne nur unter den Aspekten, „Anti-Moderne, anti-säkularer Staat und Anti-Protestantismus“ zu betrachten. Dagegen haben die Forschungen seit den 1960er Jahren auf die verschiedenen Katholiken, die für den Nationalsozialismus Sympathie hegten, aufmerksam gemacht. In der Tat näherten sich einige der Priester, die in den „Milieu-Forschungen“ als die Kerne von katholischen Milieus verstanden werden, dem Nationalsozialismus, obwohl viele Kollegen verfolgt wurden. Der vorliegende Aufsatz untersucht diese sogenannten „Braunen Pfarrer“, um die negative Seite der katholischen Kirche in der NS-Zeit und ihrer Verschiedenheit in der Moderne zu erklären.

Die bisherigen Studien behaupten, dass die „braunen Pfarrer“ hauptsächlich die „Außenseiter“ mit antisemitischer und stark vaterländischer Gesinnung waren. Diese Sichtweise hat jedoch die folgenden zwei Probleme. Erstens geht sie von der Annahme aus, dass solche Pfarrer von Anfang an dem Nationalsozialismus zustimmten. Infolgedessen wird ihre Tätigkeit in der NS-Zeit besonders konzentriert behandelt. Als ihr Beweggrund wird ausschließlich die Ideologie des Nationalsozialismus genannt. Allerdings soll nicht übersehen werden, dass die meisten „braunen Pfarrer“ schon vor der Gründung der NSDAP politisch tätig waren und dass sie ihre Beziehungen zum Nationalsozialismus bereits während Weimarer Republik aufnahmen. Zweitens betrachten die bisherigen Forschungen die „braunen Pfarrer“ als „Ausnahme“. Daher werden die „braunen Pfarrer“ nur als Episode am Rande geschildert und der Bezug auf andere Katholiken, die mit dem Nationalsozialismus sympathisierten, wird nicht hinterfragt. Um die „braunen Pfarrer“ genauer zu begreifen, ist es jedoch notwendig, ihre Gemeinsamkeit zu untersuchen und sie als eine Gruppe im Katholizismus zu beurteilen.

Das erste Kapitel des vorliegenden Aufsatzes beleuchtet demnach die Tätigkeit und den Beweggrund der Priester in der Weimarer Republik, die man in der Folgezeit die „braunen Pfarrer“ nannte. Dadurch wird gezeigt, dass sie sich dem Nationalsozialismus näherten, indem sie das kirchenpolitische Ziel der „Überwindung des konfessionellen Gegensatzes in Deutschland“ verfolgten. Sie identifizierten diese Idee mit einem „positiven Christentum“, für das NSDAP kräftige Propaganda machte.

Unter Berücksichtigung der anderen Katholiken, die für den Nationalsozialismus Sympathie hegten, versucht das zweite Kapitel, die „braunen Pfarrer“ in den Kontext des Katholizismus vor und nach dem Jahr 1933 einzuordnen. Dabei ist es besonders beachtenswert, dass drei bekannten Theologen aus dem gleichen Motiv wie dem der „braunen Pfarrer“, also zur „Überwindung des konfessionellen Gegensatzes“, den Nationalsozialismus unterstützten. Jedoch wurden von keiner

der beiden Gruppen Spuren der politischen Zusammenarbeit hinterlassen.

Die Ursache dieser Tatsache und die konkrete Tätigkeit der „braunen Pfarrer“ in der NS-Zeit beleuchtet das dritte Kapitel. Die „braunen Pfarrer“ und drei Theologen unterstützten zwar den Nationalsozialismus aus demselben Grund. Sie hatten jedoch verschiedene Auffassungen darüber, wie weit die vom Nationalsozialismus vollzogene Kirchenpolitik akzeptiert werden könne. Also setzten die „braunen Pfarrer“ trotz der anti-kirchlichen und anti-katholischen Natur des Nationalsozialismus im NS-Regime ihre Tätigkeit für den kirchenpolitischen Zweck fort, während die Theologen sich aus der Politik zurückzogen.

Aus diesen Betrachtungen geht hervor, dass die „braunen Pfarrer“, die in den Forschungen nur als „Außenseiter“ und „geringfügige Verräter“ in der niederen Geistlichkeit geschildert wurden, auch das kirchenpolitische Ziel der „Überwindung des konfessionellen Gegensatzes in Deutschland“ verfolgten.

Im Zusammenhang mit diesem Schluss soll noch eine ausführlichere Untersuchung darüber durchgeführt werden, wie weit das Motiv der „Überwindung des konfessionellen Gegensatzes in Deutschland“ damals Einfluss hatte. Die Einbindung der „braunen Pfarrer“ in die Problematik des Anti-Ultramontanismus innerhalb des Katholizismus seit dem 19. Jahrhundert zählt ebenfalls zu den anstehenden Forschungsaufgaben.